看護研究過程における学生の意識調査

川崎医療短期大学　第二看護科

宇　野　惠　子

（平成２年８月27日受理）

An Investigation on Student Nurses' Attitudes in the Process of Nursing Research

Keiko UNO

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama, 701-01, Japan
(Received on Aug. 27, 1990)

Key words：看護の基礎教育，看護研究，学生の意識調査

概　　要

卒業時看護研究を10年実施して，その意義と看護の基礎教育の中に看護研究をどのように位置づけるか今後の方向づけとする，そのはじめとして学生の意識調査をおこなった。

方法，看護研究発表会終了後，学生の研究に対する意識をアンケート方式で調査した。

対象，研究発表を行った第一看護科３年生58人と第二看護科２年生53人

結果，第一看護科学生が研究に取り組んだ時，発表終了時，先生との交流時に於いて（$x^2=10.11$，$p<0.01$）（$x^2=10.55$，$p<0.01$）（$x^2=10.81$，$p<0.05$）と第二看護科に比して有意に肯定的値を示した。両学生が否定的に受け止めていたのはiii研究発表準備に対して１N27.3%　２N47.8%であった，総体的に研究準備を除いては肯定的に受け止めていた。

はじめに

本学短大看護科では，昭和54年度卒業生より看護研究を実施している，昭和63年度卒業生で第10回となる。最初の３年間は症例研究を主とし，昭和57年以降は看護研究として研究分野を広くした。

３年課程と２年課程の学生を各クラスごとにグループ割りして看護科の教員がそれぞれ指導に当たる。研究テーマはグループ間で学生が提示してゆく。このテーマを決定してゆく過程から指導教員がかかわり，学生自身のテーマへと深める。テーマを決定するまでに多大の時間をついやしてしまうグループが出てくるのが実情である。

看護研究の目的としては１）指導教員の指導のもとに研究のプロセスを体験して研究する態度を身につける，および２）学内研究発表会を開催して，口頭発表を体験することの２つがある。つまり，３年間または２年間の講義・実習を通して各自が課題を見つけ，それを追究していく態度を学び，学習の総まとめとする。

平成２年度発足の新カリキュラムでは，基礎看護学に看護研究を位置づけている。しかし，教員間で研究結果に対する批判的な意見や，指導の困難さ，学生の研究に対する意欲のなさなど論議の的となっている。卒業期の学生は，臨床実習・保健所実習・管理実習・教科終了単位習得試験・就職・進学そして国家試験と非常に多忙であることがその一因と考えられる。

そこでまず１年間かけて取り組んできた，看護研究に対し学生がどのように受け止め，認識

しているか当の学生に問うことにした看護研究発表会を終了した学生の意識を調査した結果，学生からは看護研究に対する意義が認められた，ここに報告し今後への方向づけとしたい。

方　法

看護研究に対し学生がどのように受けとめているか，研究の過程にそって意識調査をした。また対象学生が第一看護科と第二看護科の２コースの学生であるため，第一看護科と第二看護科を比較検討する。

調 査 日：1989年３月14日

対　　象：第一看護科３年生58人，第二看護科２年生53人

質問項目：i　看護研究に最初テーマをきめ取り組んだ時の気持ち

ii　グループで看護研究を進める過程の気持ち

iii　看護研究発表準備の過程での気持ち

iv　研究発表終了時の気持ち

v　友達との交流について

vi　先生との交流について

vii　その他

①　今から研究を取るとしたら何をするか

②　終了した今の感想

i，ii，iii，ivについては三段階評価とし，この内２段階は肯定的回答とした，v，viの友達・先生との交流については４段階評価とし２段階を肯定的回答とした。viについては自由記述であるなおアンケートは無記名とした。

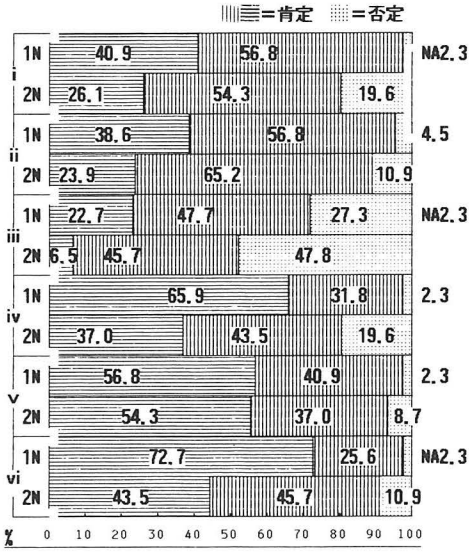
結　果

看護研究に対する学生の意識調査の回収率は第一看護科58人中44人（75.8%）第二看護科53人中46人（86.8%）であった。（以後第一看護科を１N，第二看護科を２Nとする）

１N，２N別にみた研究に対する気持ちの変化をカテゴリー別（表１）に示した。

否定的な受け止め方を中心に１Nと２Nを比較するとi最初研究テーマをきめて，取り組んだ時の気持ちは１N１人の無回答を除き否定的に受け止めたもの０人（０%）であった。２N

表１　カテゴリー別



は９人（19.6%）が否定的に受け止めていた。ii グループ研究を進める過程では，１N２人(4.5%）２N５人（10.9%）が否定的な気持ちをもっていた。iii研究発表準備の過程での気持ちは，１N12人（27.9%）２N22人（47.8%）が否定的な気持ちをもっていた。iv研究発表終了時の気持ちは，１N１人(2.3%）２N９人(19.6%）が否定的な気持ちであった。v友達との交流について，１N１人（2.3%）２N１人（2.3%）が否定的に受けとめ，顔を合わせるのも嫌だとしている。その他３人（6.5%）は以前と全く変わらないとする。vi先生との交流では，１N無回答１人を除くと否定的に受けとめているものはなかった。２Nでは，全く嫌いになった３人（6.5%）変わらないとするもの１人（2.2%）であった。

次に気持ちの推移および交流の深まりを（表２）１Nと２Nをカテゴリー別に比較してみるとi取り組んだ時，iv発表終了時，vi先生との交流において肯定的な気持ちの学生が（x^2=10.11, p<0.01）（x^2=10.55, p<0.01）（x^2=10.81, p<0.05）と１Nに有意であったiiグループ研究の過程，iii研究発表準備v友達との交流の深まりにおいて，有意差はなかった。

以上，肯定的気持ちの変化を図１でみると研究過程を通して１Nはi最初研究テーマをきめ

表２　気持の推移及び交流の深まり

		i	ii	iii	iv	v	vi
1N	イ	18(41.9)	17(38.6)	10(65.9)	29(65.9)	25(56.8)	32(74.4)
	ロ	25(58.1)	25(56.8)	21(48.8)	14(31.8)	18(40.9)	11(25.6)
	ハ	0	2(4.5)	12(27.9)	1(2.3)	0(0.0)	0(0.0)
	ニ	—	—	—	—	1(2.3)	0(0.0)
x^2検定		$x^2=10.11$ p <0.01	$x^2=2.98$ p >0.05	$x^2=6.62$ p <0.05	$x^2=10.55$ p <0.01	$x^2=2.99$ p >0.05	$x^2=10.81$ p <0.05
2N	イ	12(26.1)	11(23.9)	3(6.5)	17(37.0)	25(54.3)	20(43.5)
	ロ	25(54.3)	30(65.2)	21(45.7)	20(43.5)	17(37.0)	21(45.7)
	ハ	9(19.6)	5(10.9)	22(47.8)	9(19.6)	3(6.5)	1(2.2)
	ニ	—	—	—	—	1(2.3)	4(8.7)

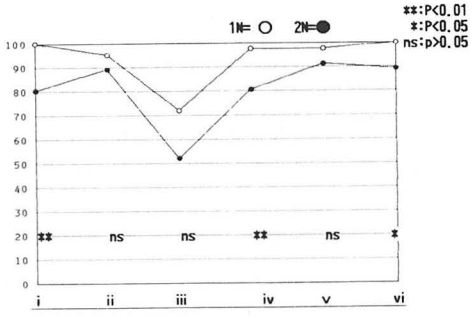


図１　肯定的気持の変化

表３　今後のテーマ

- ●今回のテーマを深めたい
- ●オムツについて
- ●在宅酸素療法
- ●訪問看護
- ●看護婦と下着
- ●ナース・シューズ
- ●精神科医療に関するもの
- ●宗教問題

取り組んだ時，vi先生との交流時100%，無回答を除くと全員が肯定的な無持ちを持っていた。iii発表準備を除いては，95%以上が肯定的な気持ちであった。２Nは全員とする研究過程はなかったiii発表準備を除くと80%が肯定的気持ちを持っていた。iii発表準備の過程では１N70%が２N52%が肯定的な気持ちであった。

研究の過程全般を通して１Nに比較して２Nが肯定的気持ちの割合が低い。その原因は２年間教育と３年間教育が同じ研究プロセスをふませているため過密となる。研究のグループ活動が正規の時間割に組めない，このしわ寄せが放課後に繰り下げられ，学生も教員も苦慮しているところである。

viiその他，自由記載では，「①今から研究を取るとしたら何をするか」の質問については宗教問題を除いては今回の発表テーマと全く同じであり，無記入者が大多数であった。（表３）「②終了した時の感想」では１Nと２Nに大差はなかった。肯定・否定に区分してみると，否定的な意見では◇疲れた◇研究は重荷だ◇発表準備ができない◇実習・国家試験が重なって過密だ◇グループ・メンバーがそろわない◇時間が少ない◇もうしたくないなどがあった。

肯定的な意見として◇疲れたがよかった◇他のグループの研究が聞けてよかった◇良い体験ができた◇これからも興味をもって勉強してゆきたい◇良い思い出になった◇全てに満足している◇クラスにまとまりが出てきた◇大変楽しかったなどの意見がみられた。

看護研究発表会にむけての準備時間は実際の時間割の中には取ってなく自主的な活動になっている。看護研究をする時間以上に研究発表会当日の準備に時間とエネルギーをついやしている。

以上の意見からも看護研究発表会終了直後の学生の意識調査では研究の意義はあったと思われる。

考　　察

看護の基礎教育の中で看護研究をどのように概念化しカリキュラムの中で展開してゆくか，第二看護科における課題のひとつである看護科では昭和54年度卒業生に開始した症例研究を始

め昭和57年度からは卒業時看護研究として指導し10年を経過した。平成2年度から新カリキュラムが開始され，**社会のニーズに対応出来る看護を　ゆとりある教育を**　目指して，高度な医療の場にふさわしい看護の実践者を教育する，その教育の一貫として研究を位置づけ考えていきたい。

学生が看護研究及び発表会を実施することに対して，どのように受け止めているか調査結果によると，看護研究を進める過程では1N95％2N80％以上が肯定的に受けとめている。研究発表会を開催する過程では1N70％2N52％と低くなっている。これは卒業年度の4月から研究概論の講義が15時間（内5時間図書概論）入り終了時点からグループ別に研究活動を開始する。1グループに1名の指導教員が当たり，研究テーマをきめ，研究計画を立て，研究活動が始まる。この間実習・講義・試験は随時おこなわれる。12月に入り研究発表会を開催する準備として，1Nと2Nから2名ずつ実行委員を選出しこの4名の中から実行委員長・副委員長・書記・会計を決めて実際に動き出す，すなわち全て学生が主体になって発表会を運営している。同じ時期に国家試験の手続き，模擬試験，国家試験が実施される。調査結果に見る研究発表会準備に対する，学生の受け止め方が否定的に出た原因は以上の点から理解できる。

研究の目的は1）指導教員の指導のもとに研究のプロセスを体験して研究する態度を身につけること，2）学内研究発表会を開催して口頭発表を体験することの2つがある。この目的を具体化してみると，1）―①研究のプロセスを体験する。1）―②研究する態度を身につける。2）学内研究発表会を開催して口頭発表を体験することである。

1）―①研究のプロセスを体験する。学生の問題意識に基づきテーマ，対象をきめ研究を行い，その結果に対して考察を加え，論文にまとめること，一連の研究プロセスを学習する。学生の研究結果に差はあるけれど研究計画から論文にまとめるまで教員・友達との交流をはじめ多くの文献を読み，自己をみつめる体験をしている。少数ではあるが，研究に対し否定的気持ちをもった学生は最後まで否定的気持ちを持ちつづける。この点2Nの学生に最初9人（19.6％）が否定的であり終了時も同じであった最初から意欲的に取り組んでいる学生は，研究過程全てに主体的に行動してゆく点から最初の動機づけが最後まで影響していることが考えられる。

1）―②研究する態度を身につける。この点については飯田[2)]は研究的な態度とは「この仕事をもう少し能率よくできないだろうか，この事実は教わったことと違うが，どうしてこうなるのか，などの理由をさらに追求していこうと努力すること，積極的に取り組んでいく態度を研究的な態度ということができる」と述べている。一つのテーマを5～6人がグループとなって追求するため自分の意見を十分反映させて，全員が積極的に取り組んでいく体験ができているとはいいがたい。グループによっては，分担制をとっていたり，多人数のグループになると，十分意見を出せなかったり，体験はさまざまである。この研究的態度は，卒業後の実践の中で看護婦として仕事に対し，問題は何であるか，それらを捕らえてどう解決するかが考えられることだと思う。

2）発表を体験する。研究の論文を皆の前で発表するのは1人であるが，発表会当日にむけて各担当役割を計画し学生が係わる。その係わりは座長・司会・評価・質疑応答などである。発表会への体験は全てが学習であり当日まで大変な時間を要する。したがって，発表は全学生がその役割のなかにおいて体験していることになる。この点発表会終了時，学生は大きな満足感に達している。今回の調査は，研究発表直後の意識調査であり，これでもって教育効果を測ることは出来ない，しかし学生は意義があったとしている。また，教員・友達との交流も深まったとしている。

看護研究の論文としてまとめあげた結果をもってみれば研究にまで達していない論文もある。しかし，短大教育で研究として何を学ばせるか，学生自身が主体的に学習をし，計画し行動する，視野をひろめつつ　**まとめあげてゆく**　この過程に学習効果があると考える。

看護の基礎教育の中で，研究をどう位置づけるかは教育が目指すところの「どんな看護婦を育てるか」にある。看護実践者である看護婦に，

研究的に物事を捕らえ常に研究心をもって看護する，看護婦を育てるとすれば，対象の健康障害から生じる，または，おこるであろう問題を予測し，常に疑問をもってそのことについて考え，事実や現象を捕え直すことによって，どのように問題を解決するか，物事に興味をもって追求する態度，すなわち研究する態度である。これは看護の臨地実習の問題解決過程（看護過程）の中で実際に使って学習していく過程でもある。

まとめと展望

学生が看護研究を始めて10年を経過し，新カリキュラムの中で看護研究を見直さねばならなくなってきた。そこでまず始めに看護研究に対する学生の意識調査をおこなった，その結果研究のプロセスを体験することに対しては肯定的に受け止めており１N95%，２N80%と高率であった。発表会開催のための準備に対しては，肯定的に受け止めている割合が１N70%，２N52%と特に２Nが低率であった。この点についてはカリキュラムの過密さと，指導教員による研究への動機づけの問題が考えられる。今回の調査でもって看護研究の教育的効果を知ることはできない，しかし学生は研究に対す意義を認めていた。

看護研究を基礎教育に位置づけ，何をどのように学びとして体験させるか，これから検討を要する。看護の教育がどんな看護婦を育てようとしているか教育機関の目的に合わせて考えてゆくべきである。実践看護婦を目指しているならば，実践能力を高めるべく位置づけとし，本研究の対象学生のように，学習活動の総仕上げとして，卒業年度の初めからその作成に取りかかり，研究成果よりも，学習や実習で体験したことを思考し想像する，仮説を立て，調査・実験活動をし，統計学を基にデーター処理を学びアセスメントする過程もある。実践的専門職業人として，大切な要素を体験を通して学習したのである。この体験が卒業後看護の現場でどのように活かされているのかは今後の課題としたい。

最後になりましたがデーター処理に御指導頂きました酒井教授に感謝いたします。

文　献

1）波多野梗子：看護理論と実践の接点　医学書院
2）飯田澄美子：研究的な態度とは　看護研究，**14**（1）（1981）
3）遠藤英子・小野寺幸子：看護基礎教育における看護研究の現状分析　第19回日本看護学会（看護教育）集録　145～147
4）川島みどり　他：臨床看護研究のすすめ　ナースステーション，**20**（1）（1990）
5）長井和夫編：教育言論　福村出版（1977）